



今回は数学科の片山先生です。太平洋戦争を舞台にした、とても人気が出た小説、『永遠の0』について書いてくださいました。読まれたことのある人も多いでしょう。この小説によって、特攻隊が改めてクローズアップされ、いろいろな特攻隊の本やテレビ番組が作られました。自分の身を敵艦にぶつけていくことで相手にダメージを与える、そんな無謀な計画を当時の日本軍は実行させたこと、そして計画を遂行できたのはほんのわずかな機体だけだったこと、兵隊の命を虫けらのように考えていたことなど、特攻隊からは様々な太平洋戦争時の日本軍の誤りが見えてきます。お国のために死ぬことは美しいことではありません。自分の命を差し出すことは、何の美談にもなりません。愚かな戦争を始めないために、過去のことを正しく知ることはとても大事です。片山先生は『永遠の0』を読まれてから、いろいろなつながりで知ることを続けられました。皆さんも、感動的な話を読んで、それで終わるのではなく、さらに次につながるように知ることを続けてほしいです。

## 私のおすすめの本

数学科 片山隆博



私がおすすめる本は、百田尚樹さんの「永遠の0」です。映画化もされているので、もしかしたら映画だけを見たという人もいるかもしれませんが、是非原作を読んでもらいたいです。細かなストーリーをここで説明することはしませんが、日本人として知っておか

なければならぬ戦争の歴史を、さまざまな人間模様とともに、フィクションでありながらもしっかりと学ぶことができます。

タイトルにある「0」とは太平洋戦争中、日本が誇った名戦闘機として有名な海軍零式戦闘機、通称「ゼロ戦」から来ています。太平洋戦争開戦当初、「ゼロ戦」は世界最高峰の戦闘機として次々と戦果を上げます。しかし、戦争が長引くにつれ、圧倒的

# 知るをいしなげぬ『永遠の0』片山隆博

に資源で劣る日本の戦況はどんどん厳しくなり、1945年3月にはアメリカ軍が沖縄に上陸します。当時、日本政府は沖縄を本土の最前線と位置づけており、その最前線を守り抜くため無謀とも言えるさまざまな作戦が実行されていきます。その中の1つに、航空特攻作戦がありました。みなさんも「神風特攻隊」と聞けばピンとくると思います。特攻作戦とは、爆弾を装着した戦闘機で敵の艦船に体当たりして沈める、パイロットは必ず死ぬという「必死」の作戦です。

「永遠の0」では特攻隊員として命を懸けて戦場に散っていった人々の描写が随所に登場します。そんな特攻隊員のうちの1人である、この本の主人公のセリフの中で特に印象的な言葉があります。それは、「生きて帰りたい」という言葉です。当時の日本軍人、ましてや特攻を命じられた者がこの言葉を口にするのは非常識でした。今では考えられませんが、国のためなら喜んで命を捧げるといふ軍事教育が徹底されていました。しかし、この当時に特攻隊員として命を落としたすべての人が、喜んで死を受け入れて散っていったのでしょうか。家族や友人・恋人を残し、死ぬことを命じられた人々の心境は計り知ることができません。



私はこの本を読んでから、鹿児島県にある知覧特攻平和会館という場所を訪れました。そこには、特攻隊員の方々が残した貴重な遺品や資料の現物が展示されています。展示品を見ながら、今の平和な環境の中で生活できている有り難さをあらためて痛感しました。

少し話はそれなのですが、この本と「ゼロ戦」誕生にまつわる、宮崎駿監督の「風立ちぬ」という映画の関連性は非常に興味深いので、この本を読んでから「風立ちぬ」を観れば、また違った観点から「ゼロ戦」を捉えることができると思います。

私にとってこの本との出会いが、知覧特効平和会館へ足を運びきっかけとなり、映画「風立ちぬ」を鑑賞するきっかけとなりました。「永遠の0」を読んだことがない人は、是非読んでみてください。

